

## 講演記録

## 現代台湾の日本人ビジネスマン

渡辺 裕美\*

## はじめに

本稿は、2007年10月に、立命館大学社会システム研究所プロジェクト「中国企業文化研究会」が主催した講演会において発表した内容の梗概である。専ら、現在の台湾において活躍している日本人の紹介を中心とした内容となっている。当日、お忙しい中に参集された方々、とりわけ立命館大学の現役学生の皆様には、深く感謝を申し上げたい。

また当日は、わたくし自身の大学卒業後の経歴や中国・台湾における起業に向けた事なども話したが、今回はこの部分は割愛したいと思う。以下、順序は若干前後するが、当日の内容について紹介したい。

## 1.

「財団法人交流協会台北事務所」とは、台湾で生活をする日本人にとって日本の大使館と同じような働きをしていると受け止められている。しかしその「大使館」の代表である「大使」は、正式には交流協会台北事務所長と呼ばれ、歴代の所長においてもその肩書で親しまれてきた。「大使」の肩書が中国との関係により使用できないのは仕方がないとしても、「所長」という言葉の響きは台湾における日本を代表する人物に対してあまりにも軽々しく、多くの在日日本人は違和感を覚えてきたことだろう。

この度、前所長の内田氏に代わって新しく赴任された池田維氏との訪問インタビューで交換した名刺を拝見して、先ず鮮烈な印象を受けた。池田氏の名刺には日本交流協会とあり、肩書には代表と記されていたからである。その点について「交流協会というのは曖昧で何なのか分かりにくいので、頭に日本とつける事によって、交流協会の本質をある程度日本人、台湾人双方に理解してもらうことが出来るのではないかと思います。もっとも定款には交流協会と称するとあり、正式なものではありませんが」と代表は説明してくれた。

---

\* 連絡先：渡辺 裕美

機関/役職：龍羽国際文化有限公司/董事長（2007年度立命館大学社会システム研究所客員研究員）

機関住所：台北市南京東路一段13巷9號

E-mail：hiromi@lupin-taiwan.com

また、「私は肩書にこだわるわけではありませんが、所長というのは中国語では課長クラスにあたります。台湾との関係において日本を代表する肩書としては不適切だと思う。代表というのが一番適切な呼び方ではないかと考え、名刺に代表という言葉を使いました。このことについては、当地の類似の各国機関もほとんど「代表」という言葉を使用しています。東京の本部には連絡済みです」とのこと。ですから皆様も今後はぜひ代表と呼んでください。

さらに着任の抱負をおたずねしたところ、「日本と台湾は経済、文化、人的往来などの面で緊密で良好な関係にあり、人の往来は両方で年間200万人を超えています。さらに台湾という存在は日本の平和と安定のために非常に重要です。私は外務省に入省して42年、そのうちの約15年は台湾を含めた中国の関係の業務に関わってきました。現在、日本と台湾の間に正式な外交ルートはなく、日台関係は72年の中国との関係正常化、台湾（中華民国）との国交断絶の際に決められた様々な約束事によって制約を受けてきました。しかし断絶以来33年、現在の日台を巡る環境は著しく変わっています。中国と台湾を取り巻く国際環境の変化、兩岸間にみられる様々な動き、台湾内部の政治的变化などが挙げられます。日台関係において複雑な制約があり、また、日台を取り巻く状況にもいろいろと変化がありますが、そのような中で、引き続きより良い日台関係を築いていくこと、それが私の希望です。」と真剣なまなざしで語ってくれた。

まさに新しい日台の時代を予感させる新代表の登場である。池田代表は昭和14年、兵庫県生まれの66歳。東京大学在学中に外交官試験に合格、卒業後外務省に入省、アジア局長、官房長、オランダ及びブラジル大使などを歴任したエリートである。退官後、今年の5月に日本交流協会台北事務所代表として、ご夫妻で台湾に赴任された。趣味は絵画。鑑賞のみではなく自らも筆を持たれるとか。また、入省後すぐに語学研修で台湾に派遣され、その時に学んだ太極拳を今でも健康法として続けられているせいか、まったく年齢を感じさせないハツラツとした方である。また、外務省のエリートと聞くと、厳めしい人物を想像するが、実際の池田代表はとても気さくで話上手。そして一見温厚そうに見えるが実は内にとっても熱く激しいものを秘めている感じ。

新しい日台関係構築に情熱を燃やす池田代表の活躍が期待される。

## 2.

総合商社「伊藤忠」の台湾の代表である笠間氏をお訪ねした。電話での不躰なインタビュー依頼をあっさりと受けてくださり、また初対面にもかかわらず、冗談を言いながら温かく迎えてくださり、未熟なインタビューアの緊張をほぐしてくださった。

笠間氏は埼玉県出身の54歳。明治大学政経学部卒業後、75年伊藤忠入社、化学品・貿易部に配属された。国内勤務を経験された後、初めての海外勤務地、香港にて5年、その後一旦帰国

し98年から韓国4年、横滑りで02年6月から台湾赴任となり、現在に至っている。総合社マン一筋の人生だ。

海外勤務が当たり前の総合社マンの中でも、香港（中国）・韓国・台湾という極東三国を回る人は非常に珍しく、伊藤忠でもあまりいないそうだ。中国系民族と韓国系民族という似て非なる両民族を相手にするという事は、それぞれの特徴や個性を理解しなければならない。また、文化や習慣の違いを尊重しながら、ビジネスを進める必要がある。そこに大変なご苦労があることと思う。しかしそのことを話をされる笠間氏はどこか楽しまれているようにも見えた。

社内においては董事長という立場で、「台湾は近いけれど外国、という意識を持ち、この地にて仕事をさせてもらっている、という感謝の気持ちを忘れないように」、と指導しているそうだ。

また、笠間氏は日僑工商会の理事長にも就任している。まったくのボランティア活動だが、在台的ビジネスマンのために奔走していらっしゃる。「台湾との良好な関係作りのためには、個人個人の努力も大切ですが、やはり組織として対応しなければならないこともあります。そのような場面で活躍するのが工商会です」と会の意義を語ってくれた。

笠間氏の趣味はゴルフと料理。だいたい週末の一日はゴルフ場で過ごし、もう一日は奥様と食べ歩きをなさるとか。その上ご自身でもキッチンに立ち、料理づくりも楽しめるそうだ。どんな物を作るのですか？という私の質問に、照れながら「そばのダシとか、カレーのルーとか」との返事が……かなりこだわり派のご様子。

笠間氏は、台湾はとても良い処です。日本人たちにもっと台湾に来てもらい、見て、触れてほしい。そして台湾を好きになってもらいたい。逆に今後台湾においては、日本世代の方々の高齢化という現実はどうしようもないので、下の若い世代の人たちにも日本に興味を持ってほしい。その結果、相互理解ができれば……と語ってくれた。

三年ちょっとの台湾滞在だが、台湾のことがとても好きだとおっしゃる。そして政治的・経済的にも煩雑な大陸との関係や、国内の政治の問題など、難問山積みな台湾だが、複雑な国際社会を直視し、それを感じさせない台湾はすばらしい、私は台湾の将来を見守っていきたい、という笠間氏からは、台湾に対する愛情すら感じられた。

### 3.

台湾に在住している駐在員は、会社によって派遣されている場合がほとんどだろう。今回紹介する野村総合研究所台北支店長の川嶋一郎氏は異色の経歴を持つ。静岡県出身の川嶋氏は、早大第一文学部を卒業する際、「まだ就職したくない」という理由で、なんと卒業式の翌日、台湾にやって来たそうだ。台湾を選んだ理由については、学生時代に中国、台湾をはじめアジア

ア各国を旅行して回っているうちに、「台湾なら、生活費を稼ぎながら大学院に通えそうだと思うから」とのこと。

川嶋氏が台湾に来た1987年、台湾はまだ戒厳令下に置かれており、中国との接触は皆無だった、という。そのような環境の中、大学院で「中国人社会」について研究する一方、日本語教師や、台湾経済に関する日本語情報誌を作る、などのアルバイトをして過ごしていた。

野村総研に入ったのは、川嶋氏がちょうど修士論文を書いていた時、講演のために来台した野村総研の上層部と知り合ったのがきっかけだった。修士課程を修了し、野村総研の仕事を始めた直後、台湾の経済部が実施する日本企業誘致のプロジェクトに野村総研が協力することになった。そのために台湾に支店を開設することになり、初代の支店長、川嶋氏、台湾人社員の3人で、「レンタルオフィスからスタートした」。川嶋氏、30歳にして、初めて社会人となったわけである。

その後、台湾での事業が成長していく中で、川嶋氏は35歳の若さで野村総研台北支店長、という現職についた。そのことについては「前任の支店長がとても優秀な人でしたので、プレッシャーはありました。それに日本での勤務経験がないことも不安でした。でも『わが社の中では自分が一番台湾に詳しい』と思うようにしました」と言いつつ、「野村総研に入ったのも、支店長になったのも、流れに任せていた結果なんです」とあっさりという彼からは、気負いはまったく感じられない。

在台19年目の川嶋氏は、台湾での生活を振り返って「台湾に来て数ヶ月した頃、戒厳令が解除されました。また、李登輝時代に入ってから、政治、社会が一気に自由化・民主化に向かい、その結果、それまでタブーとされてきた中国との交流も拡大していったわけです。経済的にも80年代後半から90年代初頭にかけて、高度成長・産業構造の転換が進みました。ひとつの社会が、こんなにハイペースで大きく変化するなんて、すごいことだと感じていました。こうした変化の渦中にいられたことは、非常にラッキーでした」と語る。

「自分が好きでやって来た台湾と日本との間で、様々な企業経営者や政策遂行者の方々と向き合って仕事ができることは、大変ありがたいことです。現在、日本と台湾の関係は経済・文化などあらゆる面で、大変良好です。これは台湾の日本語世代の方々の力によるところが大きい。しかし彼らが高齢になっていく中で、この良好な関係を今後も維持、発展させていくことが、私たちの役割ではないでしょうか」とさわやかにそして飄々と語ってくれた。異色の人材の今後の活躍が期待される。

#### 4.

今回お訪ねしたのは国端汽車の総経理（というより台湾トヨタ自動車のトップと言ったほうがピンとくる）横濱孝志氏である。

インタビュー依頼の電話をした時の様子から、かなり怖そうな方をイメージしていたが、実際にお会いしたご本人は、とても明るい方で、気さくに話してくれた。

横濱氏は1948年生まれの大阪出身、72年にトヨタに入社し、人事労務、国内営業、物流関係などの部署を経た後、03年1月に6代目総経理として台湾に来た。まったく海外と関係のない仕事をしてきた横濱氏にとって、この人事はまさに「青天の霹靂」だったという。それまで何の接点もなかった台湾で、いきなり指揮を執る、ということは、戸惑いや苦労がかなりあるはずだ。しかしながら、最近のトヨタ自動車の躍進振りをみると、横濱氏の手腕によるところが大きいのではないか、と思える。

その点について質問をすると、「台湾の経済情勢が良くなったからです。」とあっさりと言われた。とはいえ、自動車業界全体に関しては経済情勢ウンヌン、と言うことができるかもしれませんが、特にトヨタがシェアを伸ばしていることについては、横濱総経理のお力では？とつっこんだところ「トヨタのシェアが伸びたのは、新しいモデルをうまく導入できたことが、台湾のお客様の支持、評価を受けたのでしょう。経済発展により、今までとは違っていろいろな種類の自動車が進められています。セダンだけではなく、ワゴン車、ミニバン、SUV、RV車などです。わが社は、そのような台湾のお客様のニーズにあったものを提供することができたのです。それは私の力ではありません。いろんな方々に支えられ、皆で頑張ったからです。」と、あくまでも謙遜されながら答えられた。

また、横濱氏は地域社会に貢献することにも力を入れている。例えば去年は、新たに台湾トヨタの歴史や自動車が出来たまでの過程などを、図式で示した資料館を作った。そして、現在は自動車工場内に見学ラインを建設している。これは工場内を安全にかつ分かりやすく見てもらうためのもので、近々に完成予定だ。資料館と併せて、一般開放するので、児童・生徒をはじめ、沢山の人の見学にきてもらいたいと考えている。

台湾については、初めての海外勤務にもかかわらず、すぐに慣れることができたそう。それは台湾が、食べ物が美味しい、安全であること、フレンドリーであること、そして一緒にいらした奥様もこちらの生活を楽しんでいること、などを挙げられた。「そのおかげで、良い環境で仕事に没頭できるので、助かっています。そして自分が台湾滞在中に少しでも多くの友人知人に來台してもらい、台湾の良さを知ってもらえるよう努めたい」と。

また、自動車会社で活躍する横濱氏は、「鉄道ファン」で、時間を作っては、台湾の鉄道に乗ることもとても楽しみとしている。台湾の在来線制覇は余す所屏東-台東間のみ。今後は阿里山鉄道をはじめ、支線にも乗りたい、そして何よりも新幹線の開通を待ち焦がれていると、まるで少年のように無邪気に語られた。

台湾の方々に最高の自動車を作って、思い切りカーライフを楽しんでもらいたい、そして車造りを通じて経済・社会に貢献する。それが私の使命です、という横濱氏の今後益々のご活躍を祈りたい。

## 5.

今回紹介する KDDI の都野守氏の「都野守」という姓はかなり珍しい方だと思う。「つのもり」と読む。何でも一族だけの姓だそう。島根県出身で1952年生まれの都野守氏は、旧 KDD に約30年間勤務、主にデータを手扱うエンジニアとして「国際電報→国際テレックス→IT 関連」という具合に国際通信ビジネス一筋にきた。その経歴はまさしく世の中の通信方面の変革と一致している、とすることができるだろう。

それまでエンジニアだった都野守氏が、会社のトップとして台湾に来たのは、2000年3月、今から6年前だ。日系企業に対して IT 関連のサービスをおこなう、という目的をもって、都野守氏の來台と同時に、それまでの旧 KDD の台湾の現地事務所を、現地法人に変更させ、そしてその初代董事長兼総経理に都野守氏が就任した。それまでエンジニアとしてやってきた都野守氏にとっては、会社経営という未知の仕事、その上初めての海外赴任でかなりのプレッシャーやとまどいは多々あったようだが「新しい世界へのチャレンジ」と前向きに受け止めてきた。そしてトラブルに直面した時も、持ち前の誠実さと明るさで見事に乗り越えてきたようだ。現在は「お客様の IT に関するあらゆるご要望に応じていきたい」という方針で、日夜奮闘している。

來台したばかりの頃は、ここ台湾の IT 環境が、エンジニアの都野守氏を刺激し、光華商業などに出向いては、自作の PC などを製作していたそう。今の都野守氏からはちょっと想像できない地味な生活だ。しかしせっかく台湾で生活しているのだから台湾を楽しまなければ、とアウトドア派に変更。休日は台北周辺の手でハイキングをしたり、淡水から船に乗って釣に出向いたり、行動的に過ごしている。ご自身が台湾での生活を満喫していることもあり、雑誌『さんご』（日本人会会報）で編集委員となり、その本の中で「台湾での休日の過ごし方」を提案・企画している。過去にはバスツアーをおこない、テレサ・テンのお墓や焼き物の街「鶯歌」などを訪れたり、ポンカン狩りに行ったりした。台湾を楽しみながら、日本人同士の交流を深める、ということを目的に今後もこのような企画を継続したい、とのこと。

また、ここ2年ほどは週2回中国語の勉強も続けている。「台湾の方と一緒にいる場面で、たとえカタコトでも中国語を使うと、相手の方はとても喜んで下さいます。もし赴任してすぐに中国語の勉強を始めていけば、台湾の生活がもっと有意義になったのに、と悔やまれるので、赴任したばかりの方は、ぜひ一日も早く中国語の勉強を始める事をお勧めします」と言う。

今後のことを質問すると、「会社の事情が許す限り、台湾で仕事を続けたいです」とすっかり台湾にはまっている様子。そして「私の台湾赴任と同時に始まった台湾新幹線のプロジェクトに、当社も関係していることもあり、なんとか私の台湾滞在中に新幹線に乗りたくたいです」と。

何事もポジティブにとらえ、公私共に台湾での生活を充実させ、楽しまっている都野守氏を拝見していると、こちらまで元気になってくる。

## 6.

台湾のローカル局である JET TV 内に「瀬上剛在台湾」という番組がある。昨年末、私のことがこの番組内で取り上げられ、案内役の瀬上さんからインタビューされた。そのテレビを見た多くの方から、「瀬上さんって、芸能人なの?」「何やってる人?」などと質問を浴びせられた。それでは、と言うことで、今回は瀬上剛さんをインタビューすることにした。

1960年東京で生まれ、日本大学歯学部付属歯科技工専門学校を卒業後、日本の歯科技工士の国家資格を取得した。たまたま台湾人の歯科の教授が日大に留学しており、その先生から「台湾の歯科技工の技術向上と人材育成のために3年だけでいいから台湾に来てくれないか」と頼まれ、「3年ぐらいなら」ということで1986年6月来台。台北市中山北路の馬偕病院にて歯科技工士として就職、ここから瀬上さんの20年に及ぶ台湾生活がスタートした。

当時はまだ経験の浅かった瀬上さんだが、まわりから過度の期待をかけられたり、日本人だから出来て当たり前、と思われたりするために、夜中にこっそり人知れず練習をするなどの努力をしたそうだ。20代半ばで来台した瀬上さんは中国語もすぐに上達し、台湾の生活にすっかり溶け込むことができた。約束の3年が過ぎた時、契約の延長を申し込まれ、「もう少しなら」と契約更新をすることにした。その後は契約期限がくる度に「あと〇年」となり、あっという間に月日が経ってしまった。そして2002年7月には独立し、今は自分の会社で歯科技工士としてがんばっている。

そして、もうひとつの顔がタレントとしての瀬上さんである。どういういきさつで歯科技工士の瀬上さんがテレビにでることになったのですか?という質問に「僕の趣味はレストアといいまして、古い車をいじることです。その趣味の仲間の中に JET TV の副社長がいました。最初は日本人が台湾を紹介する番組を作りたいから、誰か出演できる日本人を紹介してくれ、なんて頼まれていたのですが、気がついたら僕が出ることになっちゃったのです」こうして2004年9月からテレビに出演することになったそうだ。ずぶの素人がいきなり一時間の自分の番組をもつ、とは、製作者側も出演者側もかなり大胆なことだと思うのだが、そこが台湾らしい。私が思うに、テレビで見る瀬上さんと普通にお会いして見る瀬上さんとはまったく変わらない、きっとこの自然体な感じがイイのだろう。

「芸能活動は楽しいのですが、本業もありますので、とにかく忙しいです」という瀬上さん。最近では芸能活動のきっかけになった「車いじり」もできないと。二足の草鞋を履いて多忙な毎日を送っているわけだが、そんな彼に将来の夢を質問した。「実は台湾には歯科技工士という資格もなければ、学校もないため、現場で先輩の作るのを見よう見まねで覚えていくのが一般

的です。そのため、技工士によって技術のばらつきがかなりあるのが現状なんです」と怖いことを言う。私は思わず最近入れた差し歯のことを思い、頬を押さえてしまった。「ですから僕は正しい知識や正確な技術を学ぶための学校を作り、台湾の歯科業界の発展に協力したいと考えています」と答えてくれた。今後の瀬上さんのご活躍を切実に期待する。

## 7.

そろそろビールが美味しい季節の到来，ということで，今回は「アサヒビール」の伊原寛隆さんからお話をお伺いした。

1967年長崎県生まれの今年38歳。91年にアサヒビールに入社し、先ず6年間営業職についた後、会社からの派遣で北京にて半年間の語学留学を経験した。その後、上海事務所に約4年間の勤務となり、後半の2年間は事務所所長を務めた。2001年の9月に帰国し、浅草にあるあの奇抜な形で有名な黄金色のビルに通い、国際本部のアジア担当部に所属、台湾と韓国を担当した。この時から伊原さんの台湾との関係が始まり、台湾を担当し始めてからすでに5年目となる。

アサヒビール自体は98年から台湾に進出しており、その時から一貫して代理店制度を採っている。そのため今までは日本人駐在員を置かずにきたが、アジアに力を入れる、という会社の方針の下、代理店を支援するために、駐在員制度を取り入れることとなった。このようないきさつで伊原さんが初代台湾事務所所長として05年3月から台湾に駐在している。

アサヒビールの売り上げは99年を最高に、その後は減少が続き、04年には最低の水準まで落ち込んだ。しかし伊原さんが駐在を開始し、代理店と一体となって活動した結果、05年は99年の最高時のレベルまで回復した。この理由について伊原さんは、まず「朝日ビール“乾杯”」のヒットを挙げた。「乾杯」とは、台湾人のために開発した台湾専用のビールのことで、台湾人の味覚に合うように作ったそう。第二に「アサヒスーパードライ」の販売戦略の見直し。「スーパードライ」というブランドにふさわしい、有るべきところに有る状態を作る、という考え方をベースに販売を進めることにした。そして第三に「樽詰生ビール」の販売開始。鮮度・品質管理のリスクを抱えながらも、エリア限定で行ったテスト販売で良い結果が残せた。以上のようなことが、昨年の飛躍的な回復の主な要因だそう。更に「本当に美味しい樽詰の生ビールを台湾でも飲んでもらいたい」という思いで、今年1月からは「樽詰生ビール」の全国販売を展開している。仕事の話をしている時の伊原さんからは、自分の仕事と自社商品に対する自信で満ち溢れている感じがする。

伊原さんは立派な体格にパキパキした話し方など、体育会系そのものだが、実際に今も毎朝平日40分、週末は1時間のランニングを欠かさずに続けているそう。仕事柄、お酒を飲む機会が非常に多いので、健康管理には特に気をつけています。とは言っても、走るのはスカッ



として気持ちがいいので健康管理というより、“情熱”を維持するために必要なんです（笑）」「あと、早起きして朝の時間を、本を読んだり考えごとをしたりと自分自身だけのための時間に当てています」と、まったくもって健康的な生活をおくられている。また、日本にいた時は年間平均150日間の海外出張をこなしていたので、ほとんど家族との時間が取れなかったため、ここ台湾では週末はできるだけ家族と過ごす時間になっているそうだ。奥様と3歳になる息子さんとの時間は、絶えず仕事へのテンションを高めている伊原さんにとって、何よりの癒しの時間となっていることだろう。

最後に伊原さんは「今年攻めます！」と熱くひとこと、言われた。働き盛りの38歳、とにかくエネルギッシュな伊原さんの今後の「攻め」に注目したい。

## 8.

今回はJAAの系列会社のひとつである、創造旅行社の鈴木董事長をお訪ねした。鈴木氏は1957年生まれの49歳で、和歌山県出身、82年に日本航空に入社した。入社当初は営業部の中の文化事業センターに配属され、機内誌やガイドブックの編集・出版やJALカレンダーの制作などを担当した。86年からは教育に関する部門に異動し、学生時代のアメリカ留学経験を活かして、主に英語方面、例えば訓練生の英語教育、海外赴任前の奥様のための英会話教室、帰国子女のための英語力の保持教室などを行った。そしてその教育部門が関連の別会社として法人化することとなり、新会社では英語方面だけではなく、‘マナー・接客’の教育にも拡張した。JALの客室乗務員の教育制度のノウハウを活用して、つくば博の時にコンパニオンの教育、JRの民営化の際に駅長への教育など、ユニークな仕事を手がけられている。また、この会社は独立した別会社であることから、マネージメントをも経験することとなり、それが現在の董事長としての仕事に活かされているという。

その後、JAL東京支店に異動し、2年ほど国際線の予約の仕事に携わった後、国際線の営業を東京で5年半、名古屋で4年行う。法人セールス、それもCクラス以上を担当し、そうそうたる方たちとお付き合いがあったそうだ。

この後、大分に総務課長として就き、市内・空港の人の採用、予算、運営、広報宣伝の窓口、営業と、かなり広範囲にわたっての仕事をこなす。ところが鈴木氏はこの地において仕事だけではなく、かなり変わった経験をする事となる。1つはラジオのDJ（パーソナリティ）。そのビジネスマン然とした風貌からは、まったく想像がつかないのだが、地元の大分放送で週1回、5年間もDJを続けたという。また、別府市長からの依頼（任命？）で、「温泉ツーリズム大使」を務め、別府温泉の活性化にひと役かったそうだ。かなり地元で溶け込んでいた様子だ。どちらかというと、おとなしそうで朴訥としたイメージがある鈴木氏に、このような一面があることに意外な感じがする。

2005年4月から台湾赴任となり、現職に就いてちょうど1年だ。元々転勤が多く、異文化に入り込むことに慣れているため、台湾の生活にもすんなりと溶け込めたという。仕事面においては、ストレスを溜めないように気をつけながら、この社会を理解するよう心がけている。また、台湾人社員に対しては「目的意識」を持つよう指導している。

鈴木氏の趣味は「街あるき」で、休日には奥様と一緒に台湾のあちこちに出向いて、小旅行を楽しまれているそうだ。

旅行会社の経営者として來台して丸1年、今後の抱負を尋ねると、日系企業としての魅力、例えばきめ細やかなサービスや特色あるアレンジなどで、他社との差別化を図りたいという。そしてお客様に満足のいく旅行を提供していきたい、と。今までの転勤地ごとに「郷に入れば郷に従え」という気持ちを持って、地元溶け込んできた鈴木氏は、今後、ここ台湾でもその素晴らしい能力を発揮していくことだろう。

### おわりに

以上、外交関係こそ存在していないものの、実質的な経済・文化の交流が極めて旺盛な日本と台湾との現状を知る上で、多くの日本人の活躍を理解することは、重要な意義があるだろう。学生時代とは異なり、社会人生活を開始したあとになると、自らの行動に対する責任と、他者からの問いかけに対する応答責任が、必然的に生じてくる。

今回のわたくしのお話を聞き、台湾で実際に活躍する日本人の方々々とアクセスしたいと願う学生さんがいるのであれば、可能な限り仲介の労をいとわないので、是非とも自分の眼で、こうした方々の日常について、学ぶ機会を積極的に設定されることを期待している。

(付記) この原稿の内容について、もともとは『朝日新聞』香港衛星版において2005年9月以降、断続的に掲載された渡辺による記事を基礎にしていることを明記しておく。